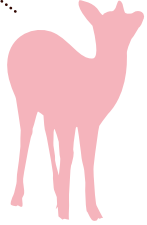


まほろばだより

2026
March
vol.56

第56号



● Contents ●

- Report1 第15回女性研究者学術研究奨励賞受賞者決定
- Report2 近畿地区近隣医科大学医療職サポート事業共同フォーラム報告
- Report3 教職員の保育環境について
- Report4 女性研究者の留学だより(3)

Report

1

第15回女性研究者学術研究奨励賞の受賞者が決定しました

本学では、将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成及びこれによる男女共同参画の促進等を目的に「女性研究者学術研究奨励賞」を設置しています。第15回となる今回は、基礎医学・教養教育部門から1名、臨床医学部門から6名、合計7名の応募がありました(図1)。

令和8年3月9日に開催された選考委員会(委員長;細井裕司学長)で慎重に審議した結果、第15回女性研究者学術研究奨励賞は整形外科学/地域医療支援・教育学講座 講師の川崎佐智子先生が受賞の栄冠に輝きました。おめでとうございます。授賞式および受賞者による記念講演は、中島佐一学術研究奨励賞授賞式と共催予定です。推薦者の整形外科学講座 河村健二教授並びに教室の皆さまにもお祝い申し上げます。

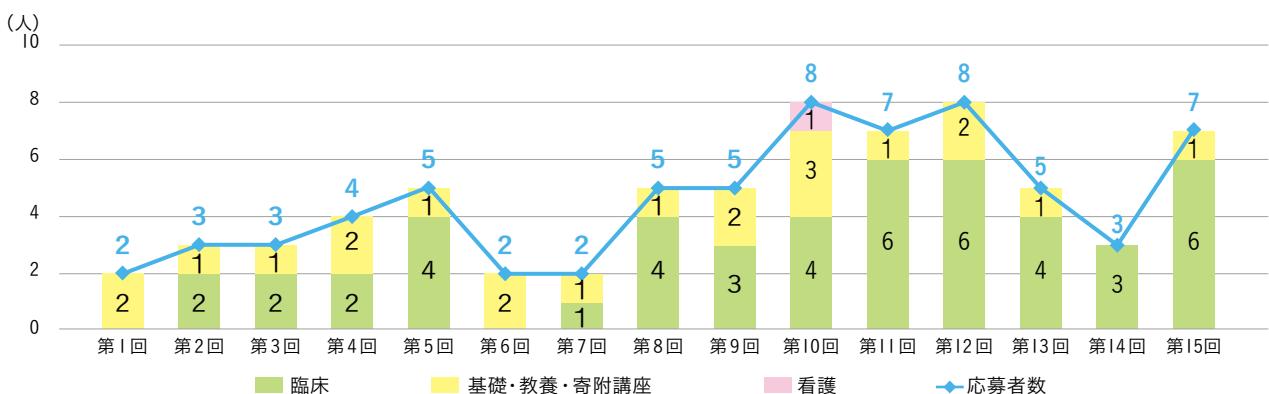
今回の応募者には2名の看護師免許を持つ研究者が含まれていました。残念ながら受賞には至りませんでした。看護師として臨床現場で培った経験が研究活動にも活かされており、今後の活躍が期待されます。受賞者の川崎先生を含め5名は現在、医師教員として多忙な臨床業務や教育に携わりながら立派に研究業績を積み上げておられます。本賞の応募には回数や年齢の制限はありません。今回受賞に至らなかった6名の研究者を含め、臨床、基礎・教養・寄附講座、看護学科から様々な年代、経歴を持つ女性研究者に今後ご応募いただけますことをセンター一同楽しみにしています。

**【受賞者】 整形外科学 / 地域医療支援・教育学講座
講師 川崎 佐智子 氏**

【研究テーマ】 頸椎症性脊髄症の痺れの可視化



図1 第1回から第15回までの応募者数の推移



近畿地区近隣医科大学医療職サポート事業共同フォーラムに 参画しました

令和8年1月9日に開催された近畿地区近隣医科大学共同フォーラムに参画しました。当日は、本学に加え大阪医科薬科大学、関西医科大学、京都府立医科大学、滋賀医科大学、兵庫医科大学の計6校から25名の担当者が参加し、Web会議で①育児中の医師・研究者へのキャリア支援、②女性医師・研究者に対する支援事業の課題と対策を中心に情報共有を行いました。あわせて、各大学の診療科別女性医師割合を共有し、女性研修医が多様な選択肢から自らの希望に応じて診療科を専攻できる環境にあるのか活発な意見交換が行われました。また、男女に関わらず若手医師が大学院生として研究に従事する際の経済的不利益について、京都府立医科大学から問題提起がなされました。本学の医師大学院生(博士課程)は、大多数が附属病院の医員として雇用されていますが、参加大学のうち少なくとも2大学では、大学院生は大学で雇用されておらず経済的な課題を抱えていることが示されました。

本学は学内保育園の充実、大学院生の雇用、妊娠・出産・育児等ライフイベントに関する福利厚生も適切に運用されており、法人が一丸となって医師の就労環境整備に尽力していることを再認識しました。女性研究者・医師支援センターでは、今後も近隣医科大学との交流を通じて情報収集に努め、臨床、教育、研究全ての分野で多様な人材が活躍できる大学を目指すという法人の基本方針に則り、様々な活動に取り組んでいきたいと思えます。

【フォーラムの様子】



代表参加者名簿

大学名	氏名	所属	職位
大阪医科薬科大学	松村 洋子	医学教育センター	特務准教授
		女性医師・研究者支援センター	センター長
関西医科大学	植村 芳子	病理学	学長特命教授
		オール女性医師キャリアセンター	センター長
京都府立医科大学	外園 千恵	視覚機能再生外科学	教授
		WLB支援センターみやこセンター	センター長
滋賀医科大学	平田 多佳子	生命科学講座 生物学	教授
		男女共同参画推進室長	
奈良県立医科大学	須崎 康恵	女性研究者・医師支援センター	准教授
		女性研究者・医師支援センター副センター長	
兵庫医科大学	吉田 実穂	ダイバーシティ推進室	課長補佐

教職員の保育環境について

令和7年5月現在で本学には3,249人(男性1,201人、女性2,048人)の職員が勤務しています。これら教職員の子育て支援の一環として、0歳児から5歳児まで各年齢の定員25人、総定員150人の学内保育園(なかよし保育園)が整備されています。生後57日から就学前までの乳幼児を入園対象とし、開園時間は7時から20時、保護者が勤務の場合には土曜日保育や金曜日の夜間保育も実施しています。保護者の職種は多岐にわたっており、学生も利用可能です(図1)。なかよし保育園では、年度途中で復職や入職する教職員の保育ニーズに対応するため4月1日以降も随時入園を受け付けています。結果、令和7年4月1日時点の在籍園児は94人でしたが、令和8年1月1日時点の在籍園児は107人に増加しています。

(なかよし保育園HP <https://www.naramed-u.ac.jp/university/kanrenshisetsu/nakayoshihoikuen/index.html>)

病児・病後児保育に関しては、平成27年1月から民間医療機関(医療法人吉川医院)と連携して生後6か月から小学生を対象に実施しています。令和6年度に本制度を利用した職員は、医師を中心に22人と全職員の1%にも満たない人数ですが(図2)、子どもの体調が悪い時のセーフティネットがあることで安心して復職し、就労を継続できる職員は多数いると思われます。病児・病後児保育の詳細やご利用を希望される方は、総務広報課にお問い合わせください(内線2226)。

図1 なかよし保育園に在籍する全園児の保護者の職種内訳

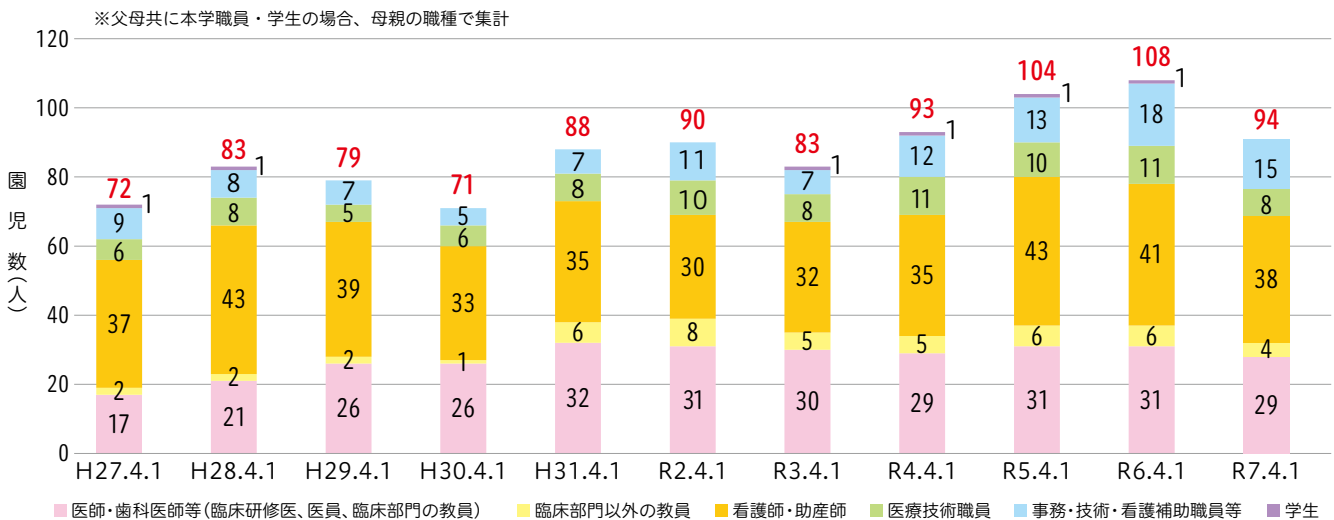


図2 本学連携医療機関での病児・病後児保育の利用職員数

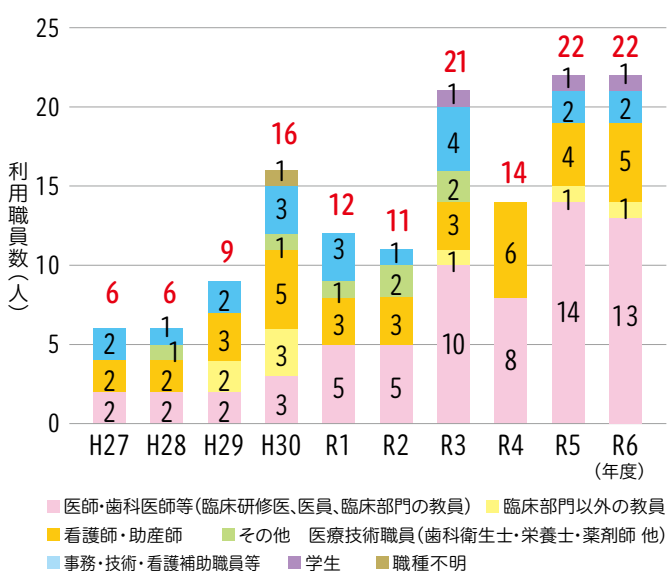
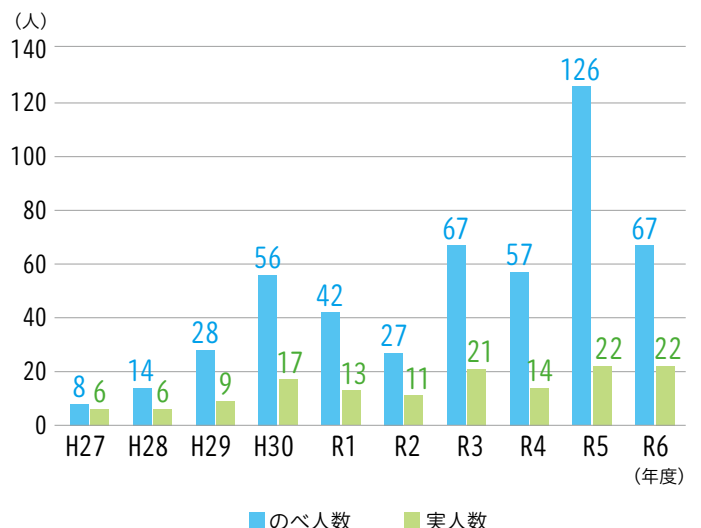


図3 本学連携医療機関で病児・病後児保育を利用した児童数



研究者・医師の海外留学は、研究・教育・診療に新たな視点をもたらす貴重な機会になります。最近、海外に派遣される国内の研究者の減少が報告される中、本学においても海外に留学する教員は減少しています。とりわけ女性教員の海外留学生者は少なく、令和元年以降ではわずか2名という状況です。前回の「女性研究者の留学だより(2)」から約5年を経て、今回は整形外科医の川崎佐智子先生に留学体験をご紹介します。身近な若手女性教員の留学は女子学生や後輩の励みとなり、本学の女性活躍推進に大きな意義をもたらすと考えます。川崎先生の今後の更なるご活躍を期待しております。

整形外科学 地域医療支援・教育学講座 講師 川崎 佐智子

私は、大学で臨床経験を積む中で、頸椎疾患に対して外科医としての技量をさらに高めたいという思いを抱くようになりました。そのような折、ヨーロッパ頸椎学会に参加した際、当時会長を務めておられた Anna MacDowall 医師の姿に強い感銘を受け、2025年にスウェーデンの Uppsala University へ留学する機会を得ました。

Uppsala University は頸椎後方固定術のインプラントで世界的に知られる大学であり、現在頸椎分野のチーフである Anna 先生は、スウェーデンで確立された全国規模のレジストリーを用いた臨床研究を中心に精力的に活動されています。現在、先生が主導する Randomized Controlled Study が2件進行しており、PhD 取得を目指す若手医師が指導のもと研究を進めています。研究の立案から計画、研究費獲得、発表、論文化に至る一連の過程を間近で学び、その卓越した推進力とリーダーシップに大きな刺激を受けました。

スウェーデンでは整形外科医の約4割が女性であり、体力面を除いて性差を感じる場面はほとんどありませんでした。女性が出産し、男性が半年から1年程度の育児休暇を取得することも一般的で、教育は大学まで無償、子育てに対する社会的支援も充実していました。また、高齢者は自立して生活する方が多く、医療費は低額で、個人番号と電子カルテが連動した効率的な医療体制が整備されていました。一方で税率は高いものの、将来の生活や経済面に対する不安は少ないと話される医師が多かったことが印象的でした。

留学中は、レジストリーを用いた臨床研究に取り組みました。日本では扱うことが難しい規模のビッグデータを用いた研究であり、術後フォローは外科医が直接行うのではなく、患者自身がオンラインで患者立脚型評価を5年間入力するシステムが採用されていました。入力が行われていない症例については研究秘書が電話連絡を行い、死亡以外のドロップアウトを最小限に抑える体制が整えられていました。また、研究と臨床の切り替えも明確で、Anna 先生は週2日の研究日と週3日の臨床日を明確に分け、高い集中力で取り組まれていました。さらに、週末は必ず2日間休みを取り、仕事から離れて家族と過ごす時間を大切にされていました。北欧の人々の人生に対するおおらかな価値観と、仕事への向き合い方を実際に体験し、日本でも働き方改革が進められる中で、大いに参考にすべき点が多いと感じました。

最後に、この留学に際し多大なるご支援を賜りました整形外科学教室の先生方に心より感謝申し上げます。また、寄稿の機会をいただきました女性研究者・医師支援センターの皆様にも御礼申し上げます。



メンターの Anna MacDowall 先生と



Anna 先生の指導を受ける若手医師たちと



クリスマスパーティの様子

[編集後記]

6年間センター長として女性研究者・医師支援センターの活動を牽引していただいた嶋緑倫先生が、本年4月に学長に就任されます。嶋先生は、小児科学教室の教授として数多くの優秀な女性医師を育成されたご経験を元に、センターの活動を多岐に渡りご指導くださりました。センター一同心より感謝申し上げます。センターでは今後も本学の男女共同参画推進に向けて、新学長のリーダーシップの下で様々な活動を続けていきたいと思っております。

副センター長 須崎康恵

[編集・発行]

奈良県立医科大学 女性研究者・医師支援センター「まほろば」
〒634-8521 奈良県橿原市四条町840
奈良県立医科大学 基礎医学棟5階
TEL: 0744-23-8011(直通)
0744-22-3051(代) 内線: 2525
E-mail: jshien@narmed-u.ac.jp

